「偽り」を借りて「真」を修める

筑波大学大学院歴史・人類学専攻
楊　家鑫

先月、帰省した折に母を連れて病院へ定期検診に行った。

朝一番の予約だったが、到着してもやはり待たされる。外来ロビーは騒然とし、案内カウンターには人が群がり、受付窓口の列は入り口まで伸びていた。母を待合室の椅子に座らせ、私は受付票を取りに向かう。戻ってみると、母は向かいの壁にある健康情報の掲示板をぼんやりと眺めていて、何かを考えているようだ。

昨年病を患って以来、母は月に2度、ここへ通っている。私たちにとって、この建物はもう隅々まで知り尽くした場所だ。1階は外来ロビー、2階はナースステーション、3階は検査科……エレベーターは常に混み合い、階段の踊り場には消毒液と埃が混ざり合ったような独特の匂いが常に漂っている。

診察を待つ間、私は通路に立っていた。すぐ傍にはある女性が壁際でうずくまり、膝に顔を埋めている。声は聞こえないが、肩が少し震えていた。手術室前の長椅子は人で埋め尽くされ、その多くが無表情のままに、ただ座っていた。もみあげが白くなった男性が、額に合わせた両手に祈りを込め、唇をかすかに動かしている。その隣の老婦人は数珠を握りしめ、1粒ずつ爪繰りながら、閉ざされた手術室の扉をじっと見つめていた。

ふと、ある言葉を思い出した。「結婚式場での誓いより、空港での別れや再会にこそ真実の愛が宿り、教会の祭壇より、病院の壁こそが人々の最も切実な祈りを知っている。」

以前この言葉を読んだときは、単に「うまい表現だな」としか思わなかった。けれど、あの日、あの場所に立って、ようやくその真意を理解した。

検査結果を受け取ると、医師は「大きな問題はありません、各数値も安定しており、このまま服薬と定期的な治療を続ければいい」と言った。母は明らかに安堵し、病院を出る足取りも心なしか軽やかだった。バスを待つ中で、母が呟いた。「さっき待っている間、ずっと考えていた。もし結果が悪かったらどうしようって」

私は言葉を返さなかった。母は続ける。「でも、途中で考えるのをやめた。考えたって仕方ないもの。来るべきものは避けられないし、来ないことを思い悩むのも無駄なことだ」。

私はただ、頷いただけだ。

あの日、私はそのことについて考え続けていた。 病院にいる時、人はおそらく最も「真相」に近い場所にいる。普段は覆い隠し、飾り立て、存在しないふりをしているものが、ここではすべて剥ぎ取られる。生老病死が、見たくなくとも目の前に突きつけられる。通路で泣く人も、手術室の前で祈る人も、痛いほど分かっているのだ。——今この瞬間、自分にできることは何もなく、ただ「待つ」しかないということを。

時間が過ぎるのを待つ。結果が出るのを待つ。苦しみが和らぐのを待つ。

それこそが「絶望」の姿なのだろう。激しく号泣するわけでも、取り乱すわけでもない。ただ静かに壁際にうずくまり、肩を震わせる。祈ったところで無駄だと知りながら、それでも手を合わせずにはいられない。閉ざされた扉にすべての希望を託し、それを凝視しながら、一秒一秒を耐え忍ぶ。

真の絶望とは、即座に救済される可能性がないことだ。

だからこそ、人は時に「優しい嘘」を必要とし、「偽りの希望」を必要とする。それは自己欺瞞ではない。自分自身のために、わずかな時間を稼ぐためだ。ほんの少しの「望み」さえあれば、もう一日を繋ぎ止めることができる。一日を耐え、また一日を耐える。そうして時の向こう側に立ち、振り返ってみれば、あんなに濃かった絶望も薄まり、淡くなり、遠ざかっていく。何度もお湯を注ぎ足した濃い茶が、最後にはただの水に戻るように。

それは信仰にも似ている。 人が信じるものは、理性の目で見れば必ずしも真実ではないかもしれない。天国は本当にあるのか。来世はあるのか。菩薩は声を聞いてくれるのか。誰も証明などできない。けれど、それによって得られる安寧や、絶望の中でも自分を保ち続ける力は、「本物」だ。その勇気は、「真実」なのだ。

では、この世で何が「真実」だというのだろう。

生活は虚構ではないか？ 私たちは毎日職場に行き、学校に行き、忙しなく動き回る。一体何のためだろう。 富や名声は虚構ではないか？ 金を手に入れ、名を成して、命を繋ぎ、世代を重ねることに、本当に意味はあるのか？

実のところ、すべては「偽り」なのかもしれない。けれど、その「偽り」のものを通じて修められた「心」だけは、本物なのだ。

俗世の富を求めるからこそ、人は学び、苦労を厭わず、自分を高める原動力を得る。名声を求めるからこそ、人は自らを律し、なすべきでないことを律する精神を養う。家族や愛する人のためなら、どんなに臆病な人でも、思いもよらない勇気を振り絞ることができる。たとえ世俗的な失敗を経歴し、金銭を失い、笑いものになったとしても、それは私たちに「不屈」の意味を教えてくれる。

人と人の違いとは、運でも才能でもなく、そうして練り上げられた「心」の差ではないだろうかと思う。同じ境遇にあっても、崩れ落ちる人もいれば、踏みとどまる人もいる。踏みとどまれるのは、痛みを感じられないわけではない。心が折れないよう、底の方で支えてくれる「何か」があるからだ。それはお金かもしれないし、名誉や家族、あるいは自分が信じると決めた、たった一行の言葉かもしれない。

「偽り」や「虚無」は、決して人生から逃げ出すための口実ではない。

私にとって、人生とは、そもそも「偽りを借りて真を修める（借假修真）」ものなのだ。信仰は偽りかもしれないが、安らぎは本物だ。名声は偽りかもしれないが、それによって得た資源は本物だ。責任は偽りかもしれないが、それによって生まれた勇気は本物だ。手術室の前で祈る人々の、その祈りの対象は存在し

ないかもしれない。けれど、誰かを思う気持ち、離れがたい切なさ、必死に何かにしがみつこうとするその心は、何よりも真実である。

早春の陽光が私と母の身に当たり、暖かかった。私は病院の方向にを振り返る。病院の窓ガラスが光を反射して白く輝き、中の様子は伺い知れない。けれど、私は知っている。あの壁が今この瞬間も、また新しい祈りを聞いていることを。